

いじめの四層構造論

森田 洋司

〒100-0001 東京都千代田区千代田
〒100-0001 東京都千代田区千代田
〒100-0001 東京都千代田区千代田

すべての社会問題ではないが、ある種の社会問題の根柢

には人間であるがゆえに、あるいは人間性を営むがゆえに派生して問題を潜在的に含んでいることがある。いじめ問題はこの種の問題に含めて考えることができる。

しかし、いじめが人間の本性や集団過程に根ざす問題だとしても、われわれはそれだけでは避けたい問題であるというつもりは毛頭ない。むしろ避けたい問題であるからこそ、人間の集団や社会ではこれらの問題の芽が伸びることを抑制するためのさまざまな歯止めを備えている。また、かりにこうした現象が具体的にあらわれても、社会や集団の局所的な現象として抑えこむ力を備えている。

現代のいじめが子ども集団の一部に偏在する局所的な問題として位置できないほど一般化し、しかも深刻な社会問題として発現してきたのは、集団の中にあるさまざまな歯止めが欠けていたり、有効に作用していないことによる。この歯止めの欠如の仕方、あるいはそれによっていじめが現象化する様相の中に現代社会が投射されているのである。いじめが人間や集団過程に共通した特質に根ざすとしても、その特質は集団や社会や時代の至みを誘因として発現してくるのである。いじめがいじめの問題は「人間」と「集団」と「時代」と「社会」とが交錯しあう問題であるといえよう。

集団のなかの反作用

いじめが発生すると、私たちはまず、「いじめっ子」——「いじめられっ子」という直接の当事者に目をそそぎ、何が原因なのか、どう対処すればよいのかを探り出そうとすることがある。そのこと自体は間違っていない。しかし、われわれはともすれば、社会や集団の秩序が、そこで生活している人々の反応の仕方によって壊れたり、強固になったりすることを忘れてしまっている。一般に、いじめで犯罪・非行であれ、おとそ逸脱行動といわれる現象は、行為の直接の当事者だけでなく、彼らを取りまく周りの人々の反応の仕方によって現象のあらわれ方が異なってくるものである。フランスの社会学者、E・デュルケムは早くからこのことを指摘していた。

このことは子どもだけの場面を考えれば理解しやすい。子どもがもし望ましくない行動をすれば、親がこれを

たしなめ、望ましい行動をとれば誉める。こうして子どもは一面では外からの声によって望ましくない行動にブレーキをかけることも、他面ではそれがよいことか悪いことかを体得し、内なる良心の声として定着させることになる。この場合、特定の場面では「規範」となり、行為に望ましいものの基準を示すのが「規範」であり、行為にたいする親の反応は「反作用」と呼ばれるものである。規範とは法律だけでなく、慣習、道徳、価値観などを含んでいるが、特定の行為が行われたとき、われわれはこの規範に即して行為が逸脱しているかどうかをはかり、これに一定の反作用を加えている。

われわれの日常生活は行為とそれへの反作用のくり返しから成っているといっても過言ではない。学級集団である、職場集団である、おとそ社会集団といわれるものは、人のこうした反作用によって秩序が保たれている。デュルケムは集団のなかに、こうした反作用が適切に行われる状態を「正常」な状態とよび、適切に行うことのできない状態を「病理」と考えた。もし社会の反作用力が衰えれば、犯罪は増大して社会の表面にあらわれ、反作用、反作用力の強すぎる過剰統制社会では過剰に犯罪者がつくり出される。したがって、正常な社会とは犯罪にたいする適切な反作用力を備えた社会といえる。

このことは、いじめにたいしてもあてはまる。いじめがあっても、誰もいじめっ子と非難したり、いじめを制止しようとする学級集団は反作用力の衰えた集団である。これらの学級集団では教師が介入しないばかり、子ども達自らがいじめを抑止できない。しかも、反作用力の衰えた学級集団では、いじめの周りに外から見えない壁をはりめぐらせており、教師の介入を妨げていることが少なくない。デュルケムになぞらえれば、まさに病んだ集団といえる。

いじめ集団の四層構造

いじめの場面では、いじめっ子（加害者）——いじめられっ子（被害者）をとりまく周りの子ども達の反応が、反作用である。周りの子ども達は、さらに二層に分かれる。一つはいじめをはやしたおもしろがって見ている子ども達（観衆）であり、もう一つは見てみぬふりをしている子ども達（傍観者）である。いじめはこうした四層構造が密接にか

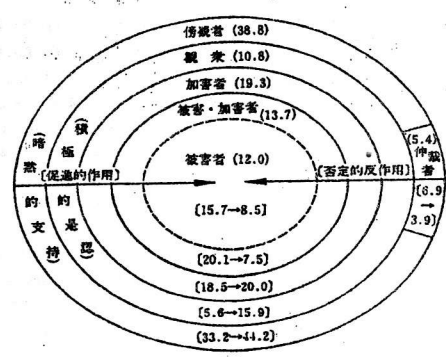
らまわった学級集団全体のあり方の方で起っている。

「いじめっ子」への服従的態度の表明であり、そのため彼らの存在はいじめの抑止力となるどころか、かえっていじめを助長し、暗黙的に支持する存在となっている。また、わすかではあるが、学級によってはいじめを止めに入る「仲介者」があらわれる。この層は「傍観者」層から積極的方向へと分化した子ども達であり、善意についての判断力を備えたグループである。しかし、これらの子ども達でさえ、現代のいじめの場面では微妙な立場にたてられることが多い。とりわけ、「いじめっ子」たちが「観衆」や「傍観者」を暴力で押えつけていたり、「無視」のように学級集団全体が集合化されたいじめでは、「仲介者」はクラスの中で浮き上ったり、無力な存在となることがあり、状況によっては傍観者の態度をとることもやむを得ない場合が少なくない。

以上のように、現代のいじめ集団の構造は本来的には「加害者」「被害者」「観衆」「傍観者」という四層構造からなっている。しかも「観衆」と「傍観者」はいじめを助長したり、抑止する重要な要素である。いじめが誰に、どんな手段で、どれだけ長く、陰湿に行われるかは、「加害者」にもよるが、同時にかなりの数にのぼる「観衆」と「傍観者」の反応によって決まってくる。

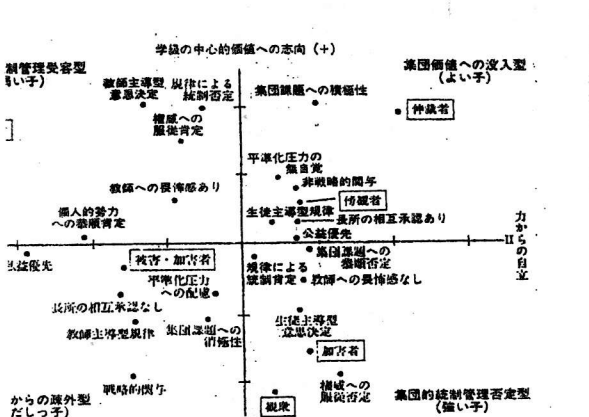
いじめ集団の構造

第1図は私たちの調査（東京・大阪の小・中学生一七八名にたいする調査）結果にもとづいて作成したいじめ集団の構造モデルである。これは現在の学級で一番最近発生



第1図 いじめ集団の構造
第1図の数字は前者が小学5年、後者が中学2年における構成比率を示す。
第2図の数字は前者が小学5年、後者が中学2年における構成比率を示す。

図の結果及びわれわれの調査のその他の知見から次のような傾向がみられる。
①まず、注目すべきことは、いじめの直接の当事者である「加害者」層、および「被害・加害者」層を含めた「被害者」層がきわめて多いことである。これらの三グループをあわせると全体の四五割に達する。いまのいじめは、昔のような年度の過ぎたやんちゃ坊主による学級の局所的な現象ではなく、学級の大部分を巻きこみつつ相互に傷つき、傷つけあう構造をもっている。



第2図 いじめでの立場の違いとその価値観

94年12月1日、葬儀の日に発見された遺書はB5判の用紙4枚に鉛筆でびっしり書かれており、同じくB5判のノート13枚にわたって書かれた「少年時代の思い出・旅日記」とともに引出しの中に目立たない状態で置かれていた。母親宛ての約110万円の借借書も残されていた。

いつも4人(名前が出なくてすみません)の人にお金をとられていました。そして今日、もっていくお金がどうもみつからなかったし、これから生きていくのも……。だから……。またみんなといっしょに幸せに、くらしたいです。しくしく。

小学校6年生ぐらいからすこしだけいじめられ始めて、中1になったらハードになってお金を取られるようになった。中2になったら、もっとはげしくなってきた。休み前にはいつも多量に6万少ないときでも3万〜4万、このころでも万。そして17日に4万5千円取られました。だから……。でも、僕がこつこつとがんばったことには、ならなかったんだよね。すみません。もつと生きたかったけど……。家にいる時がいっぱひんたのしかった。いろんな所に、旅行につれていかけてもらって、何一つ不満はなかった。けど……。あ、そうそう！ お金をとられた原因は、友達が僕の家に遊びにきたことが原因。いろんなところをいって、お金の場所をみつけると、とって、遊べなくなったので、とってこいてこうなった。

オーストラリア旅行。とても楽しかったね。あ、そーいえば、何で奴らのいいなりになったか？ それは川でできごとがきっかけ。川につれていかれて、何をするかと思ったら、いきなり、顔でドボン。とても苦しいので、手をギョウとひねって、助けを求めた。また、ドボン。こんなことが4回ぐらいあった。特にひどかったのが矢作川。深い所は水深5〜6mはありそう。図1(※略)みたいになっている。ここでAにつれていかれて、おぼれさせられて矢印の方向へ泳いで逃げたら、足をつかまれてまた、ドボン。しかも足がつかないから、とても恐怖をかんじました。それから、残念でしたが、いいなりになりました。あとちょっとひとこととしては、授業中、てきおけるなどか テストきかん中もあそんだ とかそこへへんです。

家族のみんなへ

14年間、ほんとにありがとうございました。僕は、旅立ちます。でもいつか必ずあえる日がきます。その時には、また、楽しくくらしましょう。お金の件は、本当にすみませんでした。働いて必ずかえそうと思いました

が、その夢もここで終わってしまいました。そして、僕からお金をとっていった人たちに責めないでください。僕が素直に差し出してしまったからいけないのです。しかも、お母さんのお金の2万円を僕は、使ってしまった(でも、1万円は××さんからもらったお年玉で、バックの底に入れておきました)

また、やりたいことがたくさんあったけど、……。本当にすみません。いつも、心配をかけさせ、ワガママだし、育てるのに苦労がかったと思います。おばあちゃん、長生きして下さい。お父さん、オーストラリア旅行をありがとう。お母さん、おいしいご飯をありがとう。お兄ちゃん、昔から迷惑かけてすみません。○○(弟)、ワガママばかりいっちゃダメだよ。またあえるといいですね。最後に、お父さんの財布がなくなったといっていたけど、2回目は、本当に知りません。

see you again

いつもいつも使いばしりにされていた。それに自分にははずかしくてできないことをやらされたときもあった。そして強制的に、髪をそめられたことも。でも、お父さんは自分でやっていたので、ちよつとつらかった。そして20日もお金をようきゅうされて、つらかった。

あと、もつとつらかったのは僕が部屋にいたときに彼らがお母さんのネックレスなどを盗んでいることを知ったときは、とてもショックでした。あと、お金をとっていることも……。

自殺理由は今日も、4万とられたからです。そして、お金がなくて、「とってこませんでした」っていうのも、いじめられて、もう一回とってこいていわれるだけだからです。そして、もつといかなかったら、ある一人にけられました。そして、そいつに「明日、12万円もつてこい」なんていわれました。そんな大金はえらるわけ、ありません。それに、おばあちゃんからもらった、千円も、トコヤ代も、全て、かれかにとられたのです。そして、トコヤは自分でやりました。とてもつらかったでした。(23日)

また今日も1万円とられました(24日)

そして今日は、2万円とられ、明日も4万円ようきゅうされました(25日)あと、いつも、朝はやくでるのも、いつもお茶をもっていくのも、彼らのため、本当に何もかもがイヤでした。

なぜ、もつと早く死ななかったかという、家族の人が優しくしてくれたからです。学校のことなど、すぐ、忘れることができた。けれど、このころになって、どんだんいじめがハードになり、しかも、お金がぜんぜんないのに、たくさんだせといわれます。もうたまりません。最後に、御迷惑をかけて、すみません。忠告どおり、死なせてもらいます。でも、自分のせいで、自分が使ったのでもないのに、たたかたり、けられたりして、つらいですね。

僕は、もう、この世からいませ。お金もへる心配もありません。一人分食費がへりました。お母さんは、朝、ゆつくりねるようになります。○○(弟)も勉強にしゅうちゅうです。いつもじゃまばかりしてすみませんでした。しんでおわびします。

あ、まだ、いいたいことがありました。どれだけ走り回らせていたかわかりますか。なんと、自転車で、しかも風の強い日に、上羽角(地名)から、エルエルまで、1時間ぐらいでこいていって、つらかったときもありました。あの日はたしかじゅくがあったと思います。あと、ちよく夜でいて、つらかったときもありました。そして、今度は「1万円1号」と呼ばれています。あと、遠くへ遊びにいって、途中で僕が運んできたケースありませんでした。それは僕が金をもつとってこいていって、つらかったからです。それは、なぜかという、まず、人数が4人でした。

だから、1万円も4万円になってしまうのです。しかもその中の3人は、すぐ、なぐたりしてきます。あと、とられたお金のたいがい1ケタ多しと思えます。これが僕にとって、とてもつらいものでした。これがいれば、いつまでも幸せで生きていけたのにと思えます。テレビで自殺した人のやつを見ても、なんで、あんなやつとしかとられてないんだらうっていつも思えます。最後に、おばあちゃん、本当にしんおわびします。

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

この記事で示されている出典について、該当する記述が具体的にその文脈の何ページあるいはどの章節にあるのか、特定が求められています。ご存心をお願いいたします。(2015年10月)

この記事には暴力のまたは暴力的な記述・表現が含まれています。閲覧事項をお読みください。

中野富士見中学いじめ自殺事件(なかのふじみちゅうがくいじめじくすいじけん)とは、1986年(昭和61年)に東京都中野区で起きた男子中学生の自殺事件である。俗に「ごっこ事件」とも言われ、学校担任がいじめに加担するなど日本でも初めていじめ自殺事件として社会的に注目された事件である。

事件の概要

1986年(昭和61年)2月1日深夜、東京都中野区立中野富士見中学校(2009年3月閉校、2009年4月より第一中学校と共に南中野中学校へ統合・再編)2年の男子生徒の放火である岩手県盛岡市のショッピングセンター「フェザン」地下の公衆便所で、首吊り自殺を遂げたのを、巡回中の警備員が発見された。床には「この主だ!」と記された遺書が残されていた。

男子生徒は、2年生に選抜された後、級友グループから走り回りをやらされるようになった。生徒は母にこのことを知らせた。それに対して母は走り回りをきっぱり断るに言ったという。やがていじめに達するようになり、それが徐々にエスカレートし、日常的に暴行を受けるようになった。さらに、そのいじめグループのリーダーの男子生徒の「暴行」が明らかになる。その「暴行」には担任教師4人が加担し、寄せ書きを添えていた。母は理由として「ごっこ事件」といって、いじめグループに属したと記されたことを説明した。それがきっかけとなり男子生徒は学校を休みがちになり、のちに自殺することになった。

担任教師は自分の身を守るために、担任を行っていた生徒に自殺した生徒について口止めするように言っていたことも発覚。他にもいじめを知っていたが教育委員会などに対し報告も行わなかった。自殺後に開かれた聞き取り調査では自殺した生徒に原因があるかのような発言まで行っていた。同年4月、保身していった担任教師に対し、事件後に発見された学習塾でのアルバイト行為などに誘導し、教員免許の懲戒処分が下り、校長と4人の教師に対し減給などの懲戒処分が下り、校長と2人の教師が退職した。

また、この自殺事件で同校生徒の精神面も不安定となり、授業中に自殺した生徒の名前を挙げながら、同級生と喧嘩をした挙げ句、教室を飛び出し教師ともめ合いになった生徒が、暴行容疑で逮捕された事件も起こった。ちなみにこの際、教師は生徒が教室を飛び出す直前まで、生徒同士の喧嘩を見て見ぬふりをしていた。

この事件は、マスメディアにより大々的に報道され、初めていじめ自殺事件がクローズアップされた事件でもある。報道により学校や教師の自宅、いじめに巻き込まれた生徒の自宅に嫌がらせが発生した。これ以外にも、被害者である生徒の遺族の自宅にまで嫌がらせが発生し、遺族が二次被害を受けることになった。

同年4月、警視庁はいじめに巻き込まれた16人を保護および暴行容疑で書類送検。6月、男子生徒の遺族は、遺書で名指された生徒2名とその両親、および東京都と中野区に対し、東京地方裁判所で損害賠償訴訟を起こす。同年9月、東京地方裁判所は名指された生徒2名に保護観察処分を下した。1994年3月27日、東京地方裁判所は「暴行」は「ごっこ」と認めないが、自殺直前に行われた暴行が自殺の原因となつた」としていじめそのものを否定した。更に遺書に記されていた内容について、遺族と生徒との間に問題があったことを示唆していることと述べ、被告らに400万円の賠償命令を下した。いじめを認めなかった判決に納得できない遺族は控訴し、1994年5月20日、東京高等裁判所は「暴行」ごっこなど、普通の人なら苦痛に感じるはず。それが止められなかった学校にも責任がある。但し、いじめと自殺との因果は不明である」と述べ、被告らに1,150万円の賠償命令を下した。

1995年(平成7年)11月29日 水曜日

伊藤洋子の遺書全文



お母さん、お父さん、お兄ちゃん、お姉ちゃん、みんなへ。僕は、旅立ちます。でもいつか必ずあえる日がきます。その時には、また、楽しくくらしましょう。お金の件は、本当にすみませんでした。働いて必ずかえそうと思いました。が、その夢もここで終わってしまいました。そして、僕からお金をとっていった人たちに責めないでください。僕が素直に差し出してしまったからいけないのです。しかも、お母さんのお金の2万円を僕は、使ってしまった(でも、1万円は××さんからもらったお年玉で、バックの底に入れておきました)。また、やりたいことがたくさんあったけど、……。本当にすみません。いつも、心配をかけさせ、ワガママだし、育てるのに苦労がかったと思います。おばあちゃん、長生きして下さい。お父さん、オーストラリア旅行をありがとう。お母さん、おいしいご飯をありがとう。お兄ちゃん、昔から迷惑かけてすみません。○○(弟)、ワガママばかりいっちゃダメだよ。またあえるといいですね。最後に、お父さんの財布がなくなったといっていたけど、2回目は、本当に知りません。

2017年(平成29年)6月9日(金)

「菌」死ね「日常的に」仙台・中2自殺

いじめを受けていた仙台市立中学2年の男子生徒が、4月末に自殺した問題で、市教育委員会は8日の市議会議員協議会で、生徒が通っていた学校で自殺後に実施したアンケートの結果を報告した。生徒の持ち物が「菌」と書かれたり、「死ね」と書かれたりするなど、日常的にいじめがあったとかがわかった。記述が「菌」と「死ね」と書かれていた。髪の毛を剃られたり、顔を殴られたり、頭をたたかれたり、言葉でいじめられたり、いじめを受けた。生徒の日記には「菌」が60回、「死ね」が約50回書かれていた。具体的な記述が「何回か(飛び降りた)マンシヨンの下見に行っていた」という記述があった。自殺直前に「笑っているけど目は死んでいる」と、当日の朝は「顔色が悪く、ふらふらしていた」とも記されていた。この生徒に就いては、教員2人から口に結着テープを貼られたり、頭をたたかれたり、言葉でいじめられたり、いじめを受けた。生徒の日記には「菌」が60回、「死ね」が約50回書かれていた。生徒の日記には「菌」が60回、「死ね」が約50回書かれていた。生徒の日記には「菌」が60回、「死ね」が約50回書かれていた。